ルポルタージュ

銅と暮らしのロータリー ⑬

内井昭蔵、能登を行く

文・内井昭蔵

情念とロマンが生きている土地。

能登の情念

能登を北上すると行き詰まりだ。その先は日本海であり、はるか西には沿海州、ウラジオストックがある。半島の先端は禄剛崎。どこかヨーロッパのどん詰まり、ポルトガルに似ている。ポルトガルも半島だ。大西洋をへだてアメリカ大陸がある。そういえばヨーロッパの最西端はロカ岬、これも語呂的に禄剛とよく似ている。ポルトガルのナザレのような海岸沿いの漁師町の道ばたでは、イワシの塩焼きの煙が臭う。半島は明るいが、どこか淋しい。能登を旅していると、ポルトガルの海を思い出す。

能登の夏祭りは、能都町宇出津の「あばれ祭り」で幕が開くという。輪島から車を飛ばし、海岸べりの道を二十分、下時国家の前を通り、山を越え、富山湾側に出る。めざす能都町に着く。八時近くか、祭りの火蓋を切る合図の尺玉が上がる。漆黒の海面に花火が映え、周囲の山の姿をくっきりと映し出す。町に近づくと、それまでは全くの暗やみだったが、ようやく祭りざわめきが伝わってくる。車は広場に近づけず、町の周囲にとめる。

どの家も扉や窓が開け放たれ、中ではたくさんの客人が祭りのご馳走を前にして宴たけなわである。巨大なキリコの周りには若い士達が群がっている。キリコとは神輿にお供する御神燈のことで、高さは七メートルもある。このキリコが五十二基、花火を合図に町の広場をめざして動き出す。広場には十メートルもあろうかと思われる大松明に火がともり、豪快に火の粉を吹き上げ、それを身体いっぱいに受けて、担ぎ手や太鼓たたきの子供達が舞う。その火は、能登の人々の情念の火のように燃え盛る。これからの夏の先駆けとして元気がよい。川沿いにいくつものキリコが一列に並び、広場をめざす。一瞬の輝き、松明の火が落ち、キリコを焦がす。やがてまた一つ、松明に火が入る。

能登には、日本から消えかかっている情念とロマンが生きている。このマージナルな領域、半島性、その心の底に潜む情念が火となり、夜空を焦がす。

能登の語りべ

能登には語りべがいる。輪島の能登を語る会のメンバーが揃った。そこで出た話は「狐のチョコロコ」と「舳倉島の龍神」だ。

輪島から北に直線上、七ツ島と舳倉島がある。ここは沖津宮・多紀理昆売命を祭った奥の院だ。七ツ島には中津宮・多岐都比売命、そして辺津宮・市寸島比命を重蔵神社が祭る。この神社は、海人族の神、宗像神社の流れを汲む。

輪島には海人族が住む場所がある。遠い昔、海に潜り、アワビやサザエや海草を採る人達を招いた。その子孫が、まだこの地に住んでいるという。これらの人々は特別の体格をもち、長時間の潜水に耐える肺をもつという。

語る会の会長・中村裕輪島前神社宮司は語る。「舳倉島には龍神が居ってな、たぶん母の龍神とその娘龍だろう」。舳倉島の西側のくぼんだ場所に龍神池があり、いわれてみれば龍の住みそうな池である。人は火口の跡ともいうが、単なる水たまりかもしれない。ある時この池をさらったところ、「こんな龍骨が出てきた」と、宮司は大切そうに桐の箱から黒い骨のかけらを私たちに見せてくれた。鑑定によるとこれはトドの骨ではないかという。宮司は「何といわれても、私の話にはこのような証拠があるから本当なんだ」と笑う。

狐のチョコロコは、狐の尻尾の先にある黒い色の部分が年老いるとポロッと落ちたもので、巻き毛状の物体である。中村家の家宝のチョコロコは、いつ、どうして手に入ったかは不明とのこと。これも桐の箱から出して見せてくれた。箱の表には安本稲荷大明神とある。代々伝わるもので、赤い座布団を敷いて二体の狐の人形と共に箱の中に鎮座している。見ればお白いの粉がついている。これは宮司の奥さんがチョコロコにつけたものだそ

中村裕輪島前神社宮司

大向高洲堂の大向稔社長

火の粉を浴びながら乱舞する宇出津あばれ祭り

内井昭蔵（うちいしょうぞう・SHOZO UCHII）　建築家　工学博士　滋賀県立大学教授

1933年　東京生まれ
1956年　早稲田大学第一理工学部建築学科卒業
1958年　早稲田大学大学院修士課程修了
1967年-1993年
　内井昭蔵建築設計事務所主宰
1993年-1996年
　京都大学工学部教授
1996年　滋賀県立大学教授就任

主な作品（受賞名）
身延山久遠寺宝蔵殿（レイノルズ賞AIA／BCS賞）、世田谷美術館（毎日芸術賞・日本芸術院賞）、吹上新御所、大分市美術館（BCS賞）

主な著書
健康な建築（彰国社）、ロシアビザンチン（丸善）、建築家のドローイング1　世田谷美術館（鬚々堂）

うだ。これでチョコロコは成長するらしい。チョコロコは火難除け、金運よし、とされているが、大切に祭らねばたたりがあるという。

話が弾み、話題は段駄羅のことになった。五・七・五で、上の句と下の句を中の句でつなぐ歌であり、いわば掛け言葉の遊戯だ。これは輪島に伝わる遊びで、他にも二、三ヶ所やっているところがあるそうだ。

『あぶり餅　こがしやかとなる　マヤ夫人』。
（子がシャカとなる）

私もこの段駄羅の会に入れてもらいたい。

能登を語る会のメンバー。石川県立穴水高等学校の教頭　坂尻興一郎さん

能登を語る会のメンバー。全国和船研究会と加能民俗の会の会員でもある山下　橘さん

能登を語る会のメンバー。輪島市立河井小学校の校長　高山文雄さん

狐のチョコロコ

舳倉島の龍神池から出てきた龍骨

三つの美術館

縁があって、私はこれまで石川県で三つの美術館を設計した。みな石川県立だが、どれにも素晴らしい想い出がある。平賀源内と並び称された幕末の科学者、大野弁吉の業績を顕彰する「からくり記念館」は、亡くなられた前の中西県知事から頼まれ六年前に完成したが、最近、子供のためのワークスペースを増築した。子供からくりと呼ぶ。

七塚町の「海と渚の博物館」は、かつて漁業で栄えた七塚町の漁師が使った道具を展示している。七夕の音楽会を開くのだと、館員が全員で準備をしていた。現、谷本県知事から頼まれた「七尾美術館」は、緑の中で七つのドームが輝いていた。能登で唯一の本格的な美術館として、小さいながら地域に貢献している。これらの建築をつくりながら、私は次第に能登にのめり込んでいった。能登の人々の暖かいもてなしの心が好きだ。そして何といっても、能登はあちこちに地霊の存在を感じる場所があることが素晴らしい。

餐のこと談議

ある時、輪島塗の老舗・大向高洲堂の大向稔さん、元県の文化政策課長の岩田紘一良さん、重蔵神社の能登門重矩宮司と共に、下時国家の「餐のこと談議」に参加したことがある。その時の情景、田の神をもてなす当主の振る舞いを忘れることができない。

山海の珍味、山のようなご馳走。そのあとの談議。私は木の魂の話をした。最後に暗い土間で御陣乗太鼓を見た。坊主と百姓、赤鬼、青鬼、死人などが乱舞する様子から、能登の情念とロマンを感じた。能登は人間が「生きることそのことが悲しい」ものという、わが国の仏教の思想をいまだに色濃く残している貴重な場所なのである。

山裾を利用して階段状に作られた白米千枚田は、平地が少ない外浦での耕作の苦労が偲ばれる。

重蔵神社

能登の自然に銅屋根が映える。

金沢港に面した大野町は、日本海からの強い風雪が舞う厳しい土地。古くから北前船の基地として栄え、豪商・銭屋五兵衛の活躍の場としても有名だ。**からくり記念館**は、この大野町の河口の最先端部にある。交差する木の柱が印象的な建物は、銅板平葺の美しい屋根で覆われている。沿岸部のため、軒下の部分には早くも緑青ができており、屋根色ときれいなコントラストを見せている。

金沢から輪島方面へ、左手に日本海を望む能登道路を北進すると、やがて丘陵地の稜線に添って大きな銅屋根が見えてくる。海と舟をキーワードにデザインされた**海と渚の博物館**は、古くからの漁業の町・七塚の伝統的な漁具や生活品を後世に残すために建てられた博物館だ。施設は展示室と収蔵庫からなり、周囲のたたずまいに同化するように、どちらも緩やかなフォルムの銅屋根が葺かれている。（両建築とも内井昭蔵氏設計）

からくり記念館

海と渚の博物館